

若越諸藩の

藩校教育の特質

三 上 一 夫

周知のとおり、今日教育の問題が社会全体に大きな波紋を投じている。とりわけ学校教育の在り方については、制度的な改革の必要性まで論議されるこのごろである。たしかに学校教育は、「人間形成」の場として児童期から青少年期にかけての最も重要な役割を担うことは言うまでもない。

そこでこれを歴史的にみた場合、近代学校の萌芽ないし前提とみられる近世の藩校教育につき、制度的、内容的にいささか検討を加え、今日の学校教育にかかわる課題意識をふまえながら、その特質を明らかにしてみたい。

× × × × ×

まず若越諸藩における藩校の開設期は、全国的な動向とほぼ規を一にし、幕藩体制の動揺をかこつ近世後期からはじまり、幕末にかけてつぎつぎに設立される。安永三年（一七

七四)の小浜藩順造館を皮切りに、文化元年(一八〇四)の丸岡藩平章館、同一一年(一八一四)の鯖江藩進徳館、文政二年(一八一九)の福井藩正義堂(のち明道館開設)、天保十二年(一八四一)の勝山藩読書堂(のち成器堂に改称)、弘化元年(一八四四)の大野藩明倫館(前年に大野学問所開設)、それに嘉永六年(一八五三)の府中立教館(のち進脩書院に改称)の順となる。

当時の政治社会情勢として、幕藩体制の動搖をかこつなかで、各藩とも弱体化した藩勢を建て直すためには、まず第一に家臣団グループの人材育成が最優先すべき重要課題となる。しかも特に幕末にいたり、藩の体制的矛盾から藩財政が極度に窮迫し、さらに厳しい「外圧」に触発された藩政改革において、当時の身分制に余りこだわらない思い切った人材の発掘・登用が焦眉の急となり、こうした人材養成のための藩校教育が強く要請されたわけである。

そこでこれらの藩校開設に当たり、藩当局は苦しい藩財政のなかで、精いっぱい充実し

た学校組織や施設・設備、教育形態に視点をすえる。つぎに人物・学才ともに優れた教官の組織・陣容を整え、各藩独自の教育指導方針のもとに、藩士の子弟および家臣団を対象とする具体的な教育内容が定められる。

ところで、どの藩校にもほぼ共通する学習形態については、儒学を基本とし、素読・講義・会読・輪講・質問など、学力の伸展度に見合う学習段階がはっきり認められる。しかもこうした学習形態は、各藩のもつ政治社会的課題により、かなりの創意工夫がこらされる。その点、各藩の教育指導方針を端的に表明する学規(学則)により、藩校教育の特色ある内容をみてとることができるところで、藩ごとに、とりわけ個性的な特色ある教育方針、さらには内容的な側面にも照明を当ててみたい。

大野藩の明倫館の場合、館名の典拠は中国の古典『孟子』のなかの「人倫を明らかにする」で、これはまさしく教学の基本理念をあらわす。学習方法につき、「藩校規則七カ条」のうち第五条では、「会読」に参加する場合、

教科書をよく予習し、疑問の向きは会席の先輩に質問すること、そのとき先輩は丁寧な教え、たとえ質問が「浅近の事」であっても侮つてはならないと力説する。要は先輩・後輩の親密な問柄を学習面から深めようとするわけである。

また嘉永元年(一八四八)正月二〇日の藩主からの「直書」には、学習者としての第一の心構えを説く。つまりもともと「文武の道」は他人のためにするのではなく、各自の当然の職分でもあり、ましてや我等(藩主)に勤めるためのものではなく、「第一其身の職分と心得申すべく候」と生徒の自覚をうながしている。このように、あくまで学習者各自の「職分」としての明確な目的意識のもとに、主体的、積極的な「自己研修」にはげむことが要請されたのである。

勝山藩の成器堂の教育方針は、亀田梓の著した「新建成器堂記」が明記する。要は「育才成徳」をめざすが、このさい決して「術技誇博」つまり決して技をてらい博識を誇つてはならないといましめる。その具体内容は、「成器堂規則八カ条」が規定するが、特

に交友のさいの心掛けや授業中の学習態度、教科書の取り扱いなど細部にわたる注意をうながす。特に最後の第八条に、学校内の壁や柱に疵(きず)をつけたり、障子・唐紙に落書してはならない、と強くいましめるなど、学習者への厳しい「しつけ教育」が注目をひく。

丸岡藩の平章館の「平章」の呼称は、『書経』のなかの「九族既に睦(む)くして百姓を平章す」の一節に由来する。つまり内に九族(注、自己を中心に先祖四代と子孫四代、転じて血縁の一族をさす)が睦(む)くしていけば、領民全体もお互いに仲よく交わって、領内がよく治まるという意味で、藩学振興の大きなねらいとするところをうかがうことができる。要は教育の基本を、社会集団の最もベースとなる家庭・親族集団の生活倫理に求めるのが大いに着目される。

つぎに福井藩の明道館建学の基本理念は、特に熊本藩の横井小楠が嘉永五年(一八五二)三月、福井藩に答申した『学校問答書』の「学政一致」つまり学問と政治の一本化という教育学上の論策に負うところが極めて大きい。彼

は、学校は単なる「読書所」ではなく、教育の目標はあくまでも「人材」を育成し、政治に役立つものでなければならぬと強調する。

当時の窮迫した藩財政を立て直し、また厳しい「外庄」にたち向かうためにも、現実の「富国強兵」をめざす藩政改革に役立つ学問がまず第一に要請されたのである。事実同藩が幕末の段階で藩政改革に実効をあげ、公武合体派雄藩として中央政局に大きな発言力を行使し得たのも、藩校教育を基軸とする人材の育成、教学の刷新・振興によるのを見ることができない。

鯖江藩の進徳館の基本方針は、『進徳館記』が明記する。要は孔子の説く「君子進徳修業」の語を体し、「修身齊家」の本道を究めめることを力説する。さらに「進徳館学規」では、生徒の学業や日常生活のさまざまな規定をかかげるが、そのなかで特に「年の長幼、人学の新古にかかわらず、学業の次第により、諸事取扱い差等これあり候事」と、いわゆる学力の習熟度別教育を重視する。また最後の条文で「日々往返の節、途中にて立ち集り、雑談等を致しまじ候。(後略)」と規定するなど、

要は学習者の基本的な日常生活のモラルがこ

とさらに強調される。

府中(現、武生)の立教館の「立教」は、『小学』の第一章からとったもので、「立教館規則告諭」では、学問の心得を明記するとともに、教場での学習態度につき、自己の長所でもって他人の短所を助け、お互いに忠告、善導し合うよういましめる。また教官側の陣容の強化はもちろん、かれらの教員研修もなかなか徹底していた。毎月二・七の日は「回読」を行い、そのほかに「輪講」の日が設けられ、教官一同の参加により、活発な研修が計画的に実施されたのが注目をひく。

小浜藩の順造館の校名は、『礼記』のなかの「先王の詩書礼楽に順(したが)い、以て士を造る」の文句からとっている。そこで天明二年(一七八二)正月の「惣壁書」第二条には、礼儀を尊重し、特に教師への「無礼」を極力いましめる。この点さらに同年の「規則」第一条でも、師弟関係の「礼讓」の尊重を訴え、全く同じ趣旨のことを述べる。また同年の教授による「定」の第二条に、教場内の学習者の行動がすべて「礼儀」を本分とすべき

ことを説き、第三条以下でその具体内容をかかげるなど、同館の教育方針の特色をみてとることができる。

× × × × ×

若越諸藩の藩ごとに、その教育方針や内容的な特色に照明を当てたが、これらを一言で表現すれば、学習者の自己研修をめざす大野藩明倫館、しつけ教育に力こぶを入れる勝山藩成器堂、「親族和合」をかかげる丸岡藩平章館、「文武一致」を基本とする福井藩明道館、学習者のモラル尊重の鯖江藩進徳館、教官研修をすすめる府中立教館、師弟間の「礼儀」重視の小浜藩順造館と列挙できよう。さらに幕末の「外庄」に触発された福井・大野両藩の藩政改革のなかでは、「富国強兵」に直接役立つ洋学教育が強力に進められたことは周知のとおりである。

たしかに藩校教育が、かつての幕藩体制のワクのなかで創出され展開したとはいえ、その内容をつぶさにみると、教育方針や方法は決して画一的なものばかりでなく各藩校の課題意識をふまえた個性的な特質が見出される。さらに本来学校教育そのものめざす「人間

形成」は、どんな社会体制にも共通する本源的な理念と教育方法によらねばならないことを改めて痛感させられる。

ところで今日教育上の諸問題が、さまざまな角度から真剣に論議されるなかで、かつての藩校教育の具体内容にもしつかり意を注ぐことは、種々の課題説明の手がかりの一端が得られるものと考えたいのである。